

最後に、嚴寒と白夜のシベリアの地に幾万もの友が病に倒れ、飢えに苦しみながらあの世へと去った戦友を思うとき、言葉ありません。黙して御霊の御冥福を祈りつつ筆をおきます。

### 【執筆者の紹介】

生年月日 大正十二年六月二十三日生

現住所 東牟婁郡那智勝浦町宇久井五四九―二五

入隊前の職業 和歌山県庁職員耕地課勤務 昭和十九

年一月末退職、現役兵入隊のため

入隊 昭和十九年二月十日 満州山砲第八七一部隊

(牡丹江省林口) 要員として大阪府信太山 砲

兵野砲第四連隊に入隊、二月末林口兵舎に入る

終戦時の所属 関東軍第九遊撃隊(東安省斐徳) 昭和

二十年七月下旬

終戦時の階級 軍曹(候補生)

終戦時の居所 牡丹江省近辺の山の中

ソ連軍の指揮下に入った場所 牡丹江省鏡泊湖南湖頭

吉林省敦化

入ソの経路 敦化―牡丹江―ハルビン―チチハル―ハ

イラル―満洲里經由チターイルクーツク―タイ

セツト

入ソ日時 昭和二十年十一月五日

復員 昭和二十四年八月九日、舞鶴

復員後の職業 昭和二十四年十一月県庁職員採用試験

に合格

昭和二十五年一月三十日から東牟婁地方事務所農地課

勤務となる

昭和五十五年五月退職、現在に至る

(和歌山県 橋本 義治)

### 生き地獄から生還して

広島県 難波 繁 男

戦局が次第に不利になり、昭和十九年ごろから在満  
在郷軍人にも召集令状が来るようになり、私にも二十  
年五月、とうとう召集令状が届き、満州海城四五一部

隊に入隊。十七年ごろから満州各地の関東軍は、日ソ不可侵条約を信じ、南方各地に進駐した後で、兵器はほとんどなく、部隊に山砲二門と、各自に小銃一丁という装備、しばらくして内地より初年兵が入隊、部隊は六月中旬、北支方面に移動した。時たま八路軍（後の中共軍）との戦闘があり、私たちは治安維持に当たっていた。

#### ソ連軍侵入

八月九日ソ連軍が満州に侵入という情報が入り、部隊は急遽奉天まで行くことになり、遼陽まで来たところで、終戦・武装解除、後は日本軍兵舎で生活していた。ぼつぼつ逃亡者が出るようになり、隊長命で「師団長命令が出るまでは解散させぬ」と示され、私たちはその命に従っていた。関東軍の糧秣、被服廠は南満州及び遼陽にもあったが、部隊長の機転で、約二カ月分の糧秣を全員で持ち帰り自由に食料としていた。

その後ソ連軍が進駐、われわれの自由は全くなくなり、その代わり日本兵を使って糧秣や建築資材の貨車やトラックへの積み込みが強引に行われ、駅を南下す

る列車や貨車には、奥地から避難する民間人や、既に解散した軍人たちが毎日のように見うけられた。停車中「君たちはまだ解散せんのか？」の声を何回も聞きました。

十一月下旬、「日本に帰してやる…一カ月分の食糧を積み込め」の命令で、これはおかしい、朝鮮を回って帰るのには一週間もかからないのと言いながら、しぶしぶ更に要求される被服廠に行かされ、その列車に乗せられ、奉天、安奉線を行くのか？と思っていたら、列車は逆に北に向かって走り、四平街、新京を通り、更に北に向かって…それらの駅々では日本人の婦人たちが生活のため、いろいろな食べ物売りに列車の私たちに近づき、私たちもお金のある限り買ってあげる悲しい場面がくり広げられたことも忘れられない一こまでした。

列車は更に北に向かって走り続け、夜になってスピードが落ちると、飛び降り逃亡する兵もあり、ハルビンを過ぎ、とうとう黒河まで来た所で列車を降ろされました。これはシベリアに連行されるのでは？…の噂が

あちこちでささやかれました。眼前の黒龍江は既に凍結しており、先遣部隊により川に枕木を置きレールが敷設され、満州からの略奪物資を積んだ貨車やトラックが頻繁に通っており、我々が積んだ一カ月分の食糧もまもなくだまされ、貨車ごとソ連本国に掠奪されてしまいました。我々は四日ほどこの黒河にいる間に、日本人が住んでいたという家を見ましたが、ビツクリ。家は無残にも破壊され、家の基礎だけしか残っていない状態でした。五日目再び貨車に乗せられ、黒龍江に沿ってひた走りました。

入ソしたその日から

やっぱり噂どおりと歯を食いしばり貨車上の人となった我々を尻目に貨車は走り続けましたが、これからは大麥、食事は今までは全く異なり、高粱、粟、トウモロコシなどを煮たお粥か黒パン、一日によく二食、貨車が停まらなかつたら一食、それが三週間もの長旅体にはシラミがわき出し、痒くて眠れない日が続き、着いた所はクラスノヤルスクという都市の収容所でした。その所長が「お前らは日露戦争、シベリア出兵の

仇討のため、これから賠償の肩代わりとして働かせる……と正に青天の霹靂のことば……これは大変なことになったぞ……と顔を見合わせました。

収容所の生活、作業、酷寒、生きて帰れるだろうか？

クラスノヤルスク収容所に三日ほどいて、千五百人の部隊は半々に別れ、我々はトラックに乗せられ約十時間、途中から山道に入り、丸太を鋸で止めた道を走り、着いた所はバトルイハという、今まで囚人たちが入っていた半地下の収容所。電灯はなくランプ、寒いので早速ドラム缶で火を焚く。焚かねば凍傷になるというので不寝番をきめ焚き続けました。幸い薪は前位の囚人たちの使い残したもので助かり、いざ寝たと思つたら今度は南京虫の襲来……で夜明けまで眠られない、こんな毎日が何日も続きました。

後に分かったことですが、ここにいた囚人たちは非の重い者ばかりで、死の山バトルイハと恐れられていた由、それらは皆独ソ戦に狩り出されたそうで……。

その後作業に出るようになったが、その仕事は伐採。

今までに経験のない者ばかり、それが人跡未踏の森山に入り、幹回り一メートル以上の松林が無限に広がっている中で、監督から作業方法を習い二メートルぐらゐの鋸を両方から引いて巨木を切り倒す。初めはなかなかできなかつたが慣れるに従い、ノルマを決められ、その上寒さが零下六〇度までは作業をやらされ、それ以下なら収容所で待機、零下六〇度になったらまた作業と厳しい状態。しかも銃剣つきで、加えて飢えと南京虫、シラミなどによる病魔に侵され、最初の年に早くも、朝起きて見たら毎日五、六名の死者。冬の間にも百名以上が亡くなり、また、凍傷で手足の指が腐ってしまい作業のできない人が薬を与えられず、わずかに赤チンを付けるくらいの治療しかしてもらえず、二十一年になって、帰国だと収容所を出た人が、無事に日本に帰れたかどうかも分かりません。

炊事の設備が足りないため、毎朝五時起床、朝食を食べ終わったらまた寝こみ、八時、作業に出発。そのとき昼食を持ってゝの状態で、バトルイハに着いたのが七五〇名いたのが一年で五五〇名足らずに減少。そ

の上、死んだ人は冬の間はそのまま放置され、六月中旬ごろ、土が掘れる時期になったら、山の中に三・五メートル四方、深さ二・五メートルの穴を掘らせ、死体を投げ込み、上から少し土をかぶせて、その山の木を伐採し終わったら次の山に移動するので遺体はそのまま放置されました。

そのほか、一年以上風呂に入れないため、シラミによる発疹チフス患者が始めて、所長と交渉の結果、ドラム缶三個が到着、作業に出ない炊事の兵隊たちにより、にわか作りの風呂場完成、日曜日に交代で二週間一回入れようになったのは、生き地獄のような間での少しのやすらぎの一こまです。

我々の食糧を運んで来るソ連兵が途中で横流しをし、着いた時には六〇%くらいになっていたことが度々あり、一食分黒パン二〇グラム、キャベツとジャガイモの小さいのが三切れくらい入った塩味のスープが飯盒三分の一、これだけ。到底重労働には耐えられるものではないので、山で草、野ネズミ、ヘビなどを取り飯盒で炊いて食べ続けたこと。以前から、何回かの所持

品検査で、満州から拉致された出発のとき、背囊にいっぱい詰め込んだ品物はほとんど盗られてしまい、隠し持っていた腕時計も空腹には耐えられずに黒パン一個と交換してしまいました。

作業は一年中伐採の繰り返しで、ノルマをだんだん上げられ、これ以上はできないというときは夜九時ごろまで、山で火を焚き作業を続けねばならないという状態。およそ人間として限界をはるかに超えた、これまた生き地獄のような毎日が二年半ほど続いたある日、技術を持っている者は申し出よ、という通達があり、早速申告したところ、十口くらいして、四〇名がトラックに乗せられ、クラスノヤルスク駅に着き、また、貨車に乗り換え、着いた所は、イルクーツクという都市で、更にトラックで着いたのが、自動車修理工場。

既に抑留者が働いており、驚いたことに、工作機械は全部と言っていいほど、日本製のもの。私の配置された仕事は、まだ倉庫に置かれている、満州から略奪して来た機械を工場に据え付ける作業で、三人で行うもの。先遣の人たちの中に新京の市民部隊の人がいま

した。

ここでの作業は二カ月で終わり、次に行った所は建築現場、抑留者ばかりで六階建てのビルの建設中で、四階まで進んでおり、鉄筋を組み、煉瓦を積んで行く作業で、ここでも、セメント、鉄材、木材等すべて満州から盗って来た物ばかり。作業者と話すうち、奉天の市民部隊の人が多く、これらの人たちは、ある朝〇〇時に学校に集合せよと言われ、集まったら皆、トラックに乗せられ駅に、そこから貨車に乗せられ、とうとうシベリアに連行された由。朝家を出た時が家族との別れだった……と聞かされました。私個人として言うなれば、ここに来てからは、山とは違い食事は多少良くなり、冷凍肉、魚が少し入るようになり、山の収容所では見たことも考えたこともない演芸会を月一回見られるようになりました。

ダモイ（帰ること）ダモイと騙され続けて作業させられていたのが、昭和二十三年十一月下旬、待ちに待ったダモイの本当のダモイかも？の噂に変わり、しばらくすると、収容所を出て貨車に乗せられ、また、どこ

かに連れて行かれるのかとの不安も始めました。でもついにダモイの時がきて、私たちを乗せた貨車は途中バイカル湖を過ぎ、着いた所はナホトカ港の横に天幕を張った収容所に入れられ、一週間の船待ちとなった。

その間シベリアで共産教育を受けた党員たちにより、生まれて初めて赤旗の歌を歌わされ、将校たちの吊るし上げの様子を見る日が続き、五日目の朝、全員屋外に並ばされ、各天幕とも右から五〇名ほどの、我々の犠牲になり、まだ共産党の教育が足りないという理由で貨車に乗せられシベリアに逆戻りという悲しい出来事が起き、そこで引率指揮者が、党員の見ていない所に全員を集め、「これ以上犠牲者を出さぬために、この際黨員になったふりをし我慢しよう」と話してくれ、私たちはこの話を聞くようにしました。もしそうしなかったら先の五〇人組のごとくシベリアに逆戻りさせられているでしょう。

それから七日目、待望の船が入港、乗船の際はソ連将校が立っていて、拳手の礼をしないと乗せてくれぬ：

とのことで、拳手の礼（かっこうだけ）をして乗船。懐かしい日本の船「第一大拓丸」で、船員も日本人だったので心の中で万歳を叫び、これで日本に帰れるぞ：と皆で喜び合いました。二十九日出港、沖合に出た所で、「ソ連スターリンの馬鹿ヤロー」と叫びました。

冬の日本海は波が荒く、揺れに揺れ、夢にも見た折角の米の飯も、食べたら嘔吐するので二日ほど全然食べられず、三日目、日本の姿が見えるようになったころ、幸い波も穏やかになり、やっと食にありつきました。昭和二十三年十二月一日舞鶴港に着いたときは心の底から喜びが湧き上がり、皆で大声をあげ喜び合いました。

迎えに来てくれた父から、在満中の工場や家の財産などを根こそぎ奪われ、婦女子がはずかしめられた様子などを次々と聞くにつけても、あの惨状を目の当たりに体験した私には、帰国の喜びと混じり合い憤激がこみ上げ、止まることのない日数、何とか就職しようとしても共産国から帰ったことが理由で就業ができなかったり、共産黨員でもないのにこのような差別を付

けられるとは……と憤激したことにもしばしば遭いました。

【執筆者の紹介】

住 所 安芸郡府中町本町三一五一四

生年月日 大正八年十一月十日

昭和七年三月 大連伏見台尋常高等小学校卒業

昭和十二年三月 大連工業学校機械科卒業

昭和十二年四月 木谷製作所入所

昭和十四年十二月 現役 入隊

昭和十六年六月 除隊

昭和十八年四月 関東工業会技能試験合格

昭和二十年五月 応召

昭和二十年十二月 シベリア抑留

昭和二十三年十二月 復員

昭和二十六年一月 東洋工業株式会社入社

昭和五十一年十二月 〃 停年退職

昭和五十三年十二月 〃 二年間嘱託

(広島県 山田 浩三)

入隊・転進・

満州・シベリア抑留

岡山県 土居 一志

大正十年十二月十六日 広島県瀬戸田町林生まれ、尋常高等小学校卒業。家業・農業、六男一女の四男として生まれ、岡山県玉野市の三井造船に昭和十一年四月より昭和十七年十二月の入隊まで勤務。

昭和十七年十二月十日、本籍地西部第二部隊に十七年現役兵として入隊してからの一週間は、毎日、兵器・被服などの支給で、教育はわずかな時間で、各個教練を駆け足で受けた程度だった。

十二月十六日、最後の編成が達せられた。まぎれもなく中支藤部隊、要員約八百名くらいであった。当日は最後の面会として、広島へ親兄弟五人が面会に来て最後の別れとなった。中支派遣軍から四中隊の初年兵受領に中支より来ている下士官二名に引き渡された。